

ロシア・メンシェビイキの系譜とペレストロイカ (二)

北島平一郎

目次

はしがき

一 ツアーリズム

ツアーリズム独裁

ツアーリズムと産業

ツアーリズムと行政

バチューシユカ・ツアー (Bátouchka Uapb)

二 ツアー観の転換

対ツアー請願

血の日曜日 (一九〇五年一月二三日)

ガボンと群集

ロシア・リベラリズム

ツアーリズム独裁と一党独裁

三 ツアーリズムと絶対王政

いわゆる二段階革命論

ツアーリズムと二・二六事件

日本軍人勅諭(以上前号)

はし が き(以下本号)

四 メンシェビイキとロシア革命

ボルシェビイキ革命の先蹤

マルクス、ブルードン、バクーニン(K. Marx, P. Proudhon and M. Bakunin)

ロシア・ジャコバニズム(the Russian Jacobinism)

ヘルゼン、チエルニシウスキー(A. Herzen and N. Chernyshevsky)

メンシェビイキとプレハノフ(the Mensheviks and G. Plekhanov)(以上本号)

五 メンシェビイキとロシア社会民主主義(以下次号)

二月革命、一〇月革命

教条的マルキシスト

マルクス、エンゲルスの共産党宣言

六 メンシェビイキとペレストロイカ

エコノミスト

ペレストロイカとロシア社会民主主義思想

むすび

は し が きーメンシェビイキと社会民主主義、そしてペレストロイカと米ソ両国同盟の蓋然性――

「ロシア・メンシェビイキの系譜とペレストロイカ」なる拙論において、前稿(目次参照)においては、ロシア・ツァーリズムの終焉に関する論述を筆者なりに行った。ペレストロイカによる、ソ連邦、ならびに東欧諸国の改革は、日を追って進んでいる。その展望については、また後に、機会をみてふれるとして、本稿においては、メンシェビイ

キの思想的系譜をこれもまた筆者なりに考察してみたいと思う。しかし、ここに軽々にロシア・メンシエビイキ (Russian Menshevik) なる言葉をとりあげたのであるが、この党の解釈、理論と實際を説明するのは、おそらく至難の業であろう。あえてそれをここに提出したのには、それ相当の重大なる認識と覚悟のあつてのことと思われるであらうし、またそれは、そうでなければならぬ。しかし実は、まことに不遜なる言辭を弄して申し訳ないが、そうではない。ただ、今日、ソビエト連邦をはじめ東欧の社会主義諸国に起つてゐる事態は、社会民主主義の解明——その理論と歴史と実践——なくしては、理解できないと考え、その大宗であるソビエト・ロシアの成り立ちに、最も深くかかわつた——その意味では、レーニンのボルシエビイキ (Bolshevik) よりも——メンシエビイキのそれらを考え直さなくてはならないと思惟し、不備をかえりみずしてこれらの理解に挑戦するべく、これを敢然ととりあげたにすぎないという次第である。

メンシエビイキという名称は、党名として起つた。レーニンとマルトフ (Julii Martov) ——一旦は緊密に連携してゐた二人——の疎隔から両派の党委員会、各種議會等への選挙をめぐつてボルシエビイキ、メンシエビイキの対立が生起し、そこから二つの党の誕生がはかられるのである。こうして一九〇三年以来両党の政党としての名が定着するのであるが、メンシエビイキは、レーニンの党に属さない人々の集合体というふうに定義されて、今日に及んでゐる。この点では、両党の区別は曖昧である。事実、メンシエビイキも、大衆 (the masses) は不可避の武装蜂起に備えるべし、社会民主主義者は、自然発生的革命運動を統禦できる準備を怠つてはならない、農民の間の階級闘争は、さらに激しくならなければならない、自由主義者は、彼が革命の側に立つ限りにおいて支持される、等々と述べ、それが、革命派であることを隠さない。しかしこの点において、メンシエビイキとボルシエビイキの革命主張は、

変化がないごとくであるが、ここに明瞭に読みとれるのは、ボルシェビキの革命観は、革命実践の過程において明らかなごとく、中央統制的で、一つの団体を革命の目的に向って組織し、統禦してこれを成就、達成するべく一路邁進する攻撃的目的集団であるが、メンシェビキのそれは、これもまたその主張に読みとれるごとく、革命に備えよ、革命への立場を明確にせよ、革命の側にたて、というのみで受動的である。この点大きな相異がある。そしてメンシェビキの主張は、より西欧デモクラシーに近く、ロシア社会民主的労働党 (Russian Social Democratic Labour Party, 一八九八年創設) に基礎を置く、より広い基盤における労働者党の結成を主張し、中央統禦的党活動より地方党委員会の自主的行動を重視する。労働運動の戦術として、ストライキを支持し、自由派、デュマ (Duma) との協調を策する等の活動を行うのである。これは、具体的には、メンシェビキの一九〇五年にあらわれた革命への運動形態と目される。政党的活動主張としては、八時間労働制とストライキ戦術、労働組合結成、その他労働者の自由団体結成の自由、地方党委員会活動における一層のデモクラシー達成の要望等がある。これらを立憲的議会主義と選挙戦術をもって達成してゆこうとするのである。革命的状况があらわれるまでは事態を静観し、その出現のときには、これらの目的を革命的手段をもって成就する、というのが、いまふれたごとく、これらメンシェビキの理論と実践活動から読みとれるところである。それは、明らかにマルクス、レーニン——特に後者——の主張するところとは根本的に異なる。すなわち、メンシェビキは、待ちの党活動であり、いま述べたように緊密に編みあげられ、軍事的規律によって緊縛されたうえ、専従的革命エリートによって統制された革命党とは、全く違うのである。つまり、後者は、革命攻撃奪取型戦闘集団であるからである。ここにマルクスが、ブルードンを虚仮 (stupid) 呼ばわりし、レーニンが、第三インターナショナル (the Third Communist International, Comintern) を組織して、ボルシェ

ビイキ以外の社会民主主義的革命党、もしくは、革命集団に、資本主義に対するのと別の意味の、そしてある意味では、さらに激しい攻撃をいどむゆえんがある。しかしマルクスとブルードンのこの関係については、もちろん論評なかなか困難なるごとくである。しかし、これらの考察よりして、メンシェヴィキは、その主張として社会民主主義的なそれらを内容としているということができよう(ただし、社会民主主義というそのものの定義も、曖昧で決して明確ではないけれど)。

さて、さらにここにいま一つ重大なるメンシェヴィキの要素がある。それは、拙論においてもしばしばとりあげる社会主義二段階革命論である。すなわちメンシェヴィキこそは、常にこの二段階革命論を信奉し、長い期間のブルジョア革命を、その究極の社会主義革命達成のための準備段階として存在させなければならないというものである。このため、ブルジョア政府を維持し、そこにおいてまず第一には、デモクラシー確立のため、そして究極においては、社会主義達成のためにプロレタリアートを指導し、その経済的、教育的必要を満たすべく努力するというものである。しかし、これもしばしばふれるように、ロシアにおいては、ヘルゼン、チエルニシウスキー等に代表されるように、ロシア社会のツァーリズムの下において、農村コミュニティ(rural commune)の自治的共同社会体制から、直接何の段階的社会発展を経ずして社会主義社会の建設が可能であるとする強力にして説得的な革命理論が存在する。後者は、レーニンの先蹤であるとされるが、レーニンの革命二段階論——というよりは、ロシア革命の社会的必然において、結果的にか——よりも、これらのことを考えあわせると、この主張の方が、一層直截的、革命的であるのかとさえ考えさせられる。しかして拙論においては、こうしたロシア革命理論家の言説を、メンシェヴィキ、社会民主主義派として、レーニンのボルシェヴィキと区別するという意味において、メンシェヴィキの広くて網羅的な範疇に組

入れて——成不成を別にして——考察を加えている。マルクスは、その理論よりして、革命二段階論と考へねばならないが、ロシアについては、その歴史的、社会的現実から、チュルニシウスキー等の理論に自分の革命観をあわしたとされる。マルクスの資本主義発展理論よりすれば、生産力は増大する。人為的チェック、災害等がない限り、それは大きくなり続ける。資本主義の危機は、したがって貧困のそれではなく豊富のそれである。これをエンゲルスから過剰生産 (over-production) として示されて、マルクスはこの契機から資本論 (Das Kapital) を著わすことになったというが、この生産力増強に対し、マルクス、エンゲルスは次のようにいう。マルクスもエンゲルスも人はただ単に経済的、あるいは利己的な動機によってだけ動かされるものだとは言っていない。どちらがそれであるかということは問題ではない。人を動かす動因が何であれ、人は、必然的に生産力発展の要請に彼等の社会機構や観念を適合させるように、歴史的必然によって緊縛されている。人は、と、マルクスは言う。常に彼自身の歴史をつくる。しかし人は、それを彼自身の時代と環境の問題と、物質的現実によってしつらえられた制限的条件の中でそうするのである、と。そして生産力増強の問題と、それにかなる歴史的社会的環境を整備することとが、人に課された使命であるとするのが、この主張の中から出てくる要約であるとされ、ここから導かれる社会主義革命の理論は、科学的必然として、社会の歴史的歩みの中から自然に生れてくるのか、それとも人為的に準備されねばならないのかという大問題がこれよりして提起される。すなわち、生産力が増大し、資本主義が爛熟して自然にそれが社会主義にかわるのか。それが社会主義に転換し、より大きな生産力をのびのびと発達させてやるためには、人為的の革命が必要なのかという大問題である。この答えは、レーニンのボルシェビキ革命によって出された。いな、出されたと言わなければならぬ、とされる。そして爾来、七〇有余年の後、プロレタリア独裁が、共産党一党独裁となったことに対する批判が、

今日大きなうねりとなって世界的にまき起っているとされるのである。ちなみに言えば、過剰生産の問題は、余剰価値 (surplus value) のそれである。余剰価値は、いうまでもなく、労働力の再生産に上回る価値が労働力によって造出されるところから来る。価値は、一切の商品を生産するのに社会的に必要な労働時間の集計である。労働は、価値の源泉であるというだけでは、今日、衆知のごとく説得的ではない。余剰価値は、資本制社会では、もちろん資本家の独占物である。余剰価値は資本制社会の外へ消去してしまわない限りは、あくまでもすべての関係で、一個の資本家から他の資本家に向って方向づけられる以外には処理されることはない。過剰生産の結果、資本家は余剰価値を蓄積しつづけ、それによって窒息するほどである。そしてそこからマルキシズムが生れた。しかし同じ理論は他の装いの下にもあらわれる。すなわちこれらは、今日、ケインズ (John Maynard Keynes) によって形成せられたそれらと大きな違いはないとされる。ただ、マルキシズムは革命とプロレタリア独裁と結びつき、ケインズは、開明的自由国家 (an enlightened liberal state) と結びつく。すなわち彼は、後者が~~で~~の資本家 (bloated capitalists) からのみこんだものをはき出させる、と説く。そして、この両者の違いに新しい社会民主主義と資本主義の協調のよりどころが存在してあやまたないといわれる。話は飛躍するようであるが、メンシェヴィキと社会民主主義の定義を行うべき当該「はしがき」は、一応ここにその諸要素をあげてみた。その限り、その使命は終りである。しかし、実はそうではなく、ここから話は更に発展する。いまここにあげた協調のよりどころに対しては、すでに答えが出されている。すなわち、一つは普通選挙権 (universal suffrage) であり、他は高賃金と短時間労働 (higher wages and shorter hours) 制である。前者についてはごと新しくいうまでもないとして、後者は、つまり高度経済成長政策である。これが万策であるかどうかはもちろん問題である。しかしてなお、これに高福祉政策がからむことは

なかなかむつかしくなる。しかしいえることは、この政策が、好むと好まざるとにかかわらず、豊富の危機を常にはらむ資本主義、というよりは、経済というものの成長、発達にとっては、必然的に生れ、頼らざるを得ない政策であるのだ、ということである。そしてここに資本主義と社会民主主義の協調の原点がある。高賃金、短時間労働は、もとより、労働者の要求である。しかし、多くの資本家は、同様の方向をとり、またそのようになる。これは、一つには、発展する労働組合や他の労働者組織の強力のせいである。労働者がより豊かになれば、彼等の購買力はあがり、資本側は、より大きな利益を得る。この意味からだけでも、成功的産業は高賃金産業となり、成功的資本制国家は、高賃金国家であるとなる。資本主義における各発展は、賃金を押し上げ、賃金における各単位増加は、利潤を大きくする。普通選挙権の確立のある、そして生産力の拡大のある国においては、高賃金政策は、事実、資本主義の否定にも敗北にもならない。反対に、それらこそが資本主義を保護し、それをよりよく活動させることになるのである。くりかえしているが、歴史的、経済的発展の現(今日的)段階においては、ここにこそ資本主義と社会民主主義の抱合の契機が存在し、それは未だ他所に移ってはいないのだと言わなければならないのである。そして次には、この傾向を地球的規模で増大していくことである。足りたる(もちろん言葉のあやとして)をもって足らざるを補うということが必要であり、それが次の課題とならなければならないのである。成長と低成長、先進地域と後発地域、南北格差といったものをないませとし、地球的規模で、その段落を是正し、これらを拡大再生産していかなければならないのである。これが次のイデオロギーであり、明日への大きな発展の目標でなければならない。

ツァーリズムとメンシェヴィキについては、本文で取扱う。もちろん冒頭述べたように、不備、不実であるけれど、筆者なりの努力を重ねたい。ペレストロイカについては、いろいろの問題があり、いうなれば、エリツィン(Boris

Yeltsin)のペレストロイカなどという言葉もあるくらいであるが、この国家的、そして今日では国際的たて直しは、米国の後ろ楯を得てソ連から発し、少なくとも欧州の規模で定着していく見通しである。ゴルバチョフ (Mikhail Gorbachev)、『ブッシュ』(George Bush) 両大統領会談が、このなか世界注視の下に開かれた(一九九〇年五月三十一日、六月三日)。ここにおいては、メジャー(=major elements of a strategic-weapons reduction treaty)の調印問題、欧州通常兵器削減交渉の進展 (intensify the pace of talks to equalize and reduce limits on conventional forces in Europe)、『通商協定』、東西ドイツ統一問題の具体化 (future NATO membership (by United Germany) be conditioned upon withdrawal of American as well as Soviet troops and upon removal of all nuclear weapons from German soil) 等々、今日の大問題が、それぞれ討議せられ、解決もせられて、全世界に、世界新時代の到来をいやがうえにも印象づけた。問題は、ここに列挙した以外、なお種々のものがあることである。しかし、それらはさておくとして、私見によれば、なかならず、そこにおいて、次に重大なる問題の解決があったと考えられる。それらは、①米ソ領海協定、②米ソ海運協定、③長期穀物協定等(米ソ両国外相調印、毎日新聞一九九〇年六月二日、一四協定、一一共同声明の成立のうち)、である(この他、同日、ワシントンソビエト大使館で、カスピ海沿いの新発見油田(最大規模の一つ)の開発協定がソ連政府より米国会社(Chevron Corp.)に与えられた)。すなわち、①については、ベーリング海域の約七〇%を米国海域とし、最も有利な等距離ラインと比べ、特別に一万三千二百平方カイリを米国に付与。これにより漁業紛争、米石油会社への妨害はなくなろう。一八六七年の米露アラスカ割譲協定時に「西側境界」とされた全境界線内は、米領海であると合意。双方二百カイリ海域に重複する海域を米ソ三対一でそれぞれの領海に譲渡。②米国の運送主が、米国以外のそれらと対等の条件か、それ以上の条件のときは、ソ連政

説
府管理の積み荷については米国旗の運送者に注文する必要がある。③穀物新協定（一九九一年一月一日発効）により、ソ連は、毎年最低一千万トンの穀物（九百万トンを百万トン増加）を米国より購入、というそれぞれの問題の大筋が決定せられた。この報道が真実であれば、これらがいかに米ソ両国関係にとり画期的なものであるかは、ここに喋々するまでもなく、一目瞭然のところであろう。リスアニアのような問題については、ブッシュ大統領からその攻撃が抑制されたことをソビエト官僚は喜んでゐる（Time, Weekly Newsmagazine, June 11, 1990）。これらの①は、

おそらく歴史的に、米国の経てきた国境制定交渉、すなわち、ルイジアナ買収（Louisiana Purchase）一八〇三年、フランスより千五百万ドルにて購入。西フロリダ（West Florida）一八一三年、スペインより割取。東フロリダ、一八一九年、スペインより五百万ドルにて買収。Texas, 1845, Independent Republic, annexed. Oregon, 1845, divided with Great Britain. メキシコ獲得（Mexican Cession）一八四八年、征服、ただし、千五百万ドルの補償金を支払う。ガズデン買収（Gadsden Purchase）一八五三年、メキシコより一千万ドルにて取得——等といった諸件と比較して、その中でも特に目覚ましい成果である。これは、領海（経済水域）の問題であるが、今日、領土の変更はほとんど考えられない地球的状态での、それであるからその意義は特に大きい。いかにしても、一八六七年、米国によるアラスカ買収（七二〇万ドル）に、一三三年たつてつづく快挙である。これをブッシュ大統領は、九年の論争の後、一兵を動かすことなく、一セントを支払うことなく獲得した。ビスマルク（Otto von Bismarck）の南アフリカ、太平洋島嶼における活躍も想起され、パワール・ポリテックスの現状よりして、ソ連に対し、人、あるいはこれと呼んで、the Penance at Canossa または、Erniedrigung des Olmütz の再来となすかも知れぬ。②については、ルースベルト大統領（Franklin Delano Roosevelt）の Cash and Carry 政策の原則適用とも考えられ、

③については、その支払いに懸念を表明する (the New York Times, Sunday, June 3, 1990, IE 3) 向きもあるが、日米米穀問題の深刻さを考えれば、米国民の喜びは、思い半ばにすぎないものがあろう。日本には the Corn Laws または穀物防護法が厳然と存在している。その取扱いについては、すべからず一段の慎重さが必要である。右のこれら決定の内容をみて、吾人は、いよいよ太平洋時代の具体的幕開けを感得する。①についてはこれを解釈すれば、ペーリング海峡を米国優位のもとに、米ソ両超大国がガッチリおさえこんだということであり、この意義は頗る大きい。そしてそこから南に下ってハワイ、グアム、そのシーレーンの支配、その東には、米国の金城湯池とたのむ中南米の大陸が横たわる。そして太平洋西岸には、ウラジオストック、東京、韓国、フィリッピンが広がる。こうして太平洋時代は、七つの海に雄飛した大英帝国の盛時をはるかに凌駕した強力、安定の米ソ両国時代のそれとなる見通しと考えられる。しかしてブッシュ・ゴルバチョフ両大統領会談は、ワシントンで開かれた。まず、吾人は、ここに両国接近の一つの類型をみなければならぬ。欧州を舞台として開かれていた両首脳サミットは、おいおいと舞台を米ソ両国首都に移ってきている。フルシチョフ (Nikita Khrushchev) のワシントン国連出席以来のことである。一九八五年十一月のジュネーブ会談、一九八六年一〇月のアイスランド・レイキヤビック (Reykjavik) のそれには、レーガン (Donald Reagan) 大統領、ゴルバチョフ書記長がそれぞれの首都から該地に赴いた。前者では、ゴルバチョフ書記長は、ミッテラン (François Mitterrand) 仏大統領、サッチャー (Margaret Thatcher) 英首相、ヤルゼルスキー (Wojciech Jaruzelski) ポーランド第一書記等とそれぞれの米ソ両国サミット直前の事前協議を行っている。以来米ソ両首脳は、欧州を両国サミットの間所としていない。一九八七年一二月には、ゴルバチョフ書記長はワシントンを訪れ、その翌年六月、レーガン大統領は、モスクワを訪れた。そしてマルタを経て、米ソ両首脳の今回のワシ

説
ントン・サミット。この会談設定の場所に、吾人が、米ソ両国直接相互依存の絆を強めた事実を感得しようとするの

は、果してひがめであろうか。米ソ両国が手を握る。両国の反目は、第二次世界大戦後のことである。悠久の歴史の流れの中でみれば、まことに短い期間に過ぎない。英ソ二国、独ソ二国、仏ソ二国といった複雑な二国間関係史は、それ以前の米ソ両国の間にはない。吾人はこの事実を注視しなければならない。ソビエト・ロシアの対欧州関係史は、

決して満足の吐息をもって振りかえられる性質のものではなかったはずである。ソ連が米国に接近し、欧州離れを起

論

すことこそ、永年のロシア史の悲願ではなかったか。こうしてゴルバチョフ大統領は、ミツテラン大統領、サッチャー首相、ヤルゼルスキー大統領を離れて、今回はワシントンへ直行した。両手にかかえきれないほどの提案をもって。そして今回の決定。欧州をして両国のしりえに瞠若たらしめるパワー・ポリテックスにかかわる決定の数々。果して吾人は、これをしも米ソ蜜月、米ソ「同盟」の成立と呼ばずして何と呼ぶべきか。これこそは、米ソ両国の強力なパートナーシップのあらわれでなくして何であろうか。吾人は、この米ソ両国ワシントン・サミットの決定の中に力強い世界新時代の到来をこそ感得しなければならないのである。そしてこの米ソ両国同盟の中に太平洋新時代の大きな表現を読みとらなければならない。ここにおいて太平洋に直面する我が日本の果す政治、経済、文化的役割と活動はいかなるものとなるであろうか。それこそは、まことに大きなものとなるであろう。吾人は、このことを決して忘れるべきではない。

この変化はしかし決して人の問題ではなからう。ただただ時の問題にすぎない。一九八五年以来、数年の経過がこの地球的大変革を世界にもたらしたのである。而うして当然いふ述べたごとく、これは、太平洋全域に前進的変化をもたらし、また日本を含む太平洋西岸諸国、諸条約機構にも大きな変革をもたらすことは疑いない。しかし、その考

察は当然到底、当該小稿ではなし得ない。そのためには、稿を改めねばならない。したがってここでは、ただこの変革の原動力となったハレストロイカの考察を、ロシア・メンシェヴィキの系譜の中でとらえ続けることが、なし得べき当面の作業となる。そしてなおハレストロイカの原点たるボルハチョフ大統領の同名の著書について更にその根源的思想と思考をなぐることをもってその試みとなすのみである。借問す。何時の日か異下の阿蒙を蟬脱せんや、と赤面して不答。したがって小稿もりますこしく続編を必要とする。例のごとくでまことにばざまな次第であるが、予定のむすびをすこしく先にのびして、これらにつき大方の御叱正を乞いあげながら、今回もここに小稿につき一旦の筆を置へようとする。

(二) *Histoire diplomatique de L'Europe, par A. Debidour, 4 volumes, Librairie Felix Alcan, 1891-1920.*
Histoire des Relations internationales, tomes sixième, huitième et septième, par Pierre Renouvin, Hachette, 1955-1969. *Marxism and History, S.H. Rigby, Manchester Univ. Press, 1987.* *Karl Marx and Friedrich Engels, The Communist Manifesto, with an Introduction and Notes by A.J.P. Taylor, Penguin Books, 1988, 28th reprint.* *A Diplomatic History of the American People, Thomas A. Bailey, ninth edition, Prentice-Hall, Inc., 1970.* *A History of Russia, Paul Dukas, Macmillan, 1974.* *Time, the weekly newsmagazine, Sep. 9, Oct. 14, Nov. 18, & Dec. 2 in 1985, Oct. 6, 13 & 20 in 1986, and June 4 & 11 in 1990.* *Newsweek, the international newsmagazine, Oct. 7 & 14, Nov. 18, and Dec. 2 in 1985.* *The New York Times, Weekly Review, Sunday, Nov. 29, & Sunday, Dec. 13 in 1987 and Sunday, June 5, 1988.* *Financial Times, Europe's Business Newspaper, Friday 1-Tuesday 5 June 1990.* *Le Monde diplomatique,*

ロシア・メンシェヴィキの系譜とハレストロイカ

この小稿といえどもそれなりに成るに当っては、多くの方々の御援助を得た。前京都大学教授、現大阪経済法科大学客員教授川口是氏、京都大学附属図書館井狩らく子氏、京都大学法学部事務官絹川米子氏等の御尽力を忝うして、京都大学より貴重な書籍の閲覧を許された。これなくしては、拙稿は成らなかつた。ここに誌して関係各位に対し、深甚の謝意を表する。

一九九〇年六月三〇日、梅雨にけふる大阪上本町の寓居にて、筆者識。

四 メンシエビイキとロシア革命

ボルシェビイキ革命の先蹤

ロシアにおいてツアールイズム独裁が、歴史の流れの中で消去される運命を担うことは、ここに喋々するまでもないが、その後にはプロレタリアート独裁が出現する。しかしこのプロレタリアート独裁こそが、ここでとりあげる一党独裁の形をとるそれとなる。そしてツアールイズム独裁からプロレタリア独裁にいたる間は、当然ツアールイズム独裁を抹殺する思想的、実行的中間移行形態が存在する。もとよりプロレタリア独裁は、正面からツアールイズム独裁に対決するものであるが、この対立が持ちきたされるためには、ロシアにおいてもその先蹤が存在しなければならなかつたのである。

ツアールイズム独裁否定は、ツアールイズムそのものの支持母体といえた農村からまき起つた。このことは、大きな歴史的皮肉の一つであった。一八六〇年代に反ツアールイズム思想が形成される。それは一八六一年に断行されたアレキサンダー二世による農奴解放が、かえってツアールイズム否定の思想を培うことになつたことからきている。これもま

た大きな歴史の皮肉であった。というのは、その原因は、アレキサンダー二世の農村改革の不徹底さにあった。改革によって農奴は、その身分を所有主に対して終結することとなった。しかし家内奴隷は、土地所有を禁止された。大地的にいわれた土地解放は、三段階となり、補償を伴うこととなった。こういった解放の現実をみて農村は、深い失望に沈み、真の解放をどこに求めるかを悩まなければならなかった。人民の父であるツァー自身に改革を求めることは、いまや絶望的となったのではないか。人民の幸福をみそなわし、その運命を包容してくれるはずのツァーはいなくなってしまった。もはやツァーには頼れない。こういった思いが、農民の一人一人の胸をしめつけた。ここから農村の改革、農民の解放のためには、ツァー以外にその力を求めねばならなくなったのが、ロシア農村の当時の現実であった。そしてこの考え方からかえって農村と農民の解放を抑圧しているものとしてツァーの姿が浮び上がってくる。それまでのツァー観と違った全く逆のツァー観があらわれ出るのであった。⁽¹⁾

マルクス、ブルードン、バクーニン

こういった反ツァーリズム・ツァー観を醸成したものは、当時の革命的思想家、マルクス (Karl Heinrich Marx, 1818-83)・ブルードン (Pierre Joseph Proudhon, 1809-65)・バクーニン (Mikhail Alexandrovich Bakunin, 1814-76) 等の人々の言説であった。彼等の革命的思考が、一様に当時農村解放と農民革命に向けられたことが、ロシアに強く影響し、ロシア農民の意識の改革をもたらした。そしてアレキサンダー二世の農村改革の不徹底さが、これら革命家の言説を現実的に農民の心にしみこませ、ツァー観の伝統をくつがえして、反ツァーリズムの思想形成のよすがとなった。右記三名の革命思想家は、大体世代を同じくし、バクーニンは、農村革命について、農民の自治体 (Commune) の意識変革と発展に信頼し、その潜在力に依拠して農民の反国権叛乱を期待した。ブルードンは、地

説代、利子、利潤を否定して、農村に小農制土地所有を唱道した。マルクスは、農村の土地収奪を主張したが、彼はロ

シア・ツァーリズムに最も反対し、その意味でツァーリズム最悪の敵と目された。彼は、ツァーリズムを国内的国際的に諸悪の根源ときめつけ、これを考えれば、英帝国をさえ国際的バランスのために強化されるべきかもしれないと喝破した。⁽²⁾

論

これらの状況から「ツァー・解放者」、人民と共にあるツァー、——ツァーこそは、その絶対的権力を用いて大土地所有制を解体し、土地を農民自治体に下賜する、といったツァーへの憧憬はあとをたつこととなり、ツァーこそは人民の最大の敵、ツァーは、絶対的権力機構を強力をもって維持し、彼自らはその頂点にいる。土地を貴族階級に分配したものはこそは、ツァーである、といった思想や言説が形成され、農民の間に流布することとなった。⁽³⁾

ロシア・ジャコバニズム

右の三人の革命的思想家のうち、最も急進的なものは、もちろんマルクスであり、その主張の根幹は、革命的プロレタリア独裁であったことは、いまさら喋々するまでもない。しかし他の二人はマルクスとその点において同調せず、特にバクーニンは、彼の個人主義と無政府主義とからマルクスの主張と対立的であった。⁽⁴⁾ロシアにおけるツァー観は、思想的に主として右記三名の影響をうけてその憧憬から反発へと変貌したことは前にふれた通りであるが、ここでロシアの革命観は、ツァーへの叛乱を原点として二つの大きな流れに分れていく。それは、マルクスとバクーニン、プルードンの主張の相異から発するものでもあった。これらは、先にふれたごとく、ロシア国民の大部分を形成していた農民の間で起ってくる思想的变化であったが、この中で一つの流れは、ツァーに対する失望からそれへの反発、ツァー抹殺の革命観へとさえ発展するそれであった。これは、セルノソロベビッチ (Serno Solovovich) の「土地解

放党」(Zemlia i Volia)、『そして「我が決意」(Narodnaja Volia)の結成となり、ついに後者の手によってアレキサンダー二世の暗殺(一八八一年三月二三日)が決行される。彼等テロリズムを含む革命党は、ロシア・ジャコバニズム(Russian Jacobinism)と呼ばれるが、この思想・行動がレーニン(Lenin, Vladimir Ilyich Ulyanov)に強く影響したことは否定できない。その意味では、このロシア・ジャコバニズムは、ボルシェヴィキの先蹤と考えなければならぬ。⁽¹⁾

ヘルゼン、チエルニシウスキー

今一つ思想傾向は、西欧思潮を根幹として、これによってロシアの改革を遂行し、その近代的改革をはかろうとするものであった。これは、もとより右記三名の思想家と流れを一にするものであることはいうまでもないが、この派の創設者としてアレキサンダー・ヘルゼン(Alexander Ivanovich Herzen, 1812-70)、『チエルニシウスキー(Nikolai Gavrilovich Chernyshevsky, 1828-89)がある。これらツァーへの反撥を中核として形成される革命派は、人民党(Populists)と呼ばれるが、この中にはもとより、バクーニン、ブルードンも含まれ、彼等は、その指導者と目される。しかし、農民の団結に強い期待をかけ、フランスの明日は産業労働者によって開かれるが、ロシアの明日は農民(muzhik)によって築かれるとするヘルゼン、そして同じく、その影響下に、ピーター大帝(Peter the Great)の産業化、海軍増強、政府改革にあこがれるチエルニシウスキーに彼等は、農民党代表の名を奪われているというのが歴史解釈の現実である。特にヘルゼンは、農民の伝統的農村コミュニティの共同体、共産的自治意識に強い眷恋を持ち、ロシアでは、資本主義段階を経ずして農民自治から直接的に社会主義の建設が可能であるとした点において、彼が人民党創設者とされる名をほしいままにしているのである。

彼等二人には、西欧思潮 (westernism) とロシア主義 (Muscovite Slavophile)、そしてツアーへの憧憬が混在している。彼等は、結局、これらに失望して農村コンミューンを基礎とした社会主義建設を心に描くに至る。その時、個人主義と平等、自治、生産手段における私的所有の廃止が強い要素となるが、自由と西欧的議會主義は、彼等のとるところとはならない。これらは、モスクワ大学の農地改革党 (Land and Liberty) の秘密組織員であったザイチネフスキー (Zaichnevsky)、トカチェフ (Tkachev)、ピョートル・ラヴロフ (Pyotr Lavrov) 等によってその方向で思想的に発展させられる面が強い。これら三名については、彼等は、運動は、下からの革命によって既成秩序、組織の破壊が遂行されると共に上からの改革が、その上に強力に遂行されるべきであるという考えをもっていた。すなわち、農民を強制によってではなく、宣伝と教化によって改革主義に馴致するべしとし、これらの方法によって、自治を發達させ、革命的独裁を必要としなくなる方向をとるべきであった。⁽⁶⁾

メンシエビキとプレハーノフ

ロシアでは、伝統的ギリシア正教に基づく敬虔主義とツアー観、そしてアレキサンダー二世暗殺の後をうけたその児孫、アレキサンダー三世、ニコラス二世の登極によって、父祖の改革精神は、影をひそめ反動が再び支配する。このしめつけとロシア主義の中で、民衆思考の大勢は、ヘルゼン派のそれ、改革を望みツアーへの失望を感じながら、革命的独裁は、忌避するという方向の中へ流れてゆくのである。この中で大きな位置を占めるのは、ロシア社会民主主義の父と目される、メンシエビキ (Menshevik) のプレハーノフ (Georgi Valentinovich Plekhanov, 1857-1918) の言説である。彼は「人民党」に所属していたが、むしろ工場労働者と親近していた。ロシア・ジャコバニズム、テロリズムに反対し、早急な秘密結社とテロリズムによる政権の奪取は、民衆の支持を失って失敗し、社会に混

乱を起すと主張した。レーニンに同調しながら、ボルシェビズムに反対していく。民衆指向が基礎となり、臨時革命政府・革命的党独裁による民衆支配と教化は、民衆にもはや不必要であり、民衆の革命的政治自修が確然たる改革の基盤をつくる、とした。家父長的・權威的、また階層的命令的共産主義はとるべきでないとし、ロシアのマルクス主義者は、ツァーリズム打倒とその後のロシアにおける自由主義政治制度確立を目指して、他の反対党、また自由派と広く、強く手を握るべきであるという人民戦線理論・戦術を展開した。そしてこの民主革命こそが、ロシアの経済的発展を約束し、成長する産業プロレタリアートに、彼等のための独立の政党である、西欧の社会民主党的なそれを結成することを可能にする。そして来るべき将来の社会主義革命において労働者は、一つの階級として権力を握るべきである」と主張して、いわゆる社会主義政権確立のための二重(二段階)革命論を展開したのであった。^(?)

我々はこの記録から、ロシアにおける社会民主主義的思想の存在を垣間みることができる。この中で、経済発展が、民衆的自由制度によってもたらされるとするところ最も興味深い。しかしロシアにおいては、経済もツァーの独裁の下で国営として運営されていたのであるから、ここに市民社会の形成という萌芽をもつこの考えとそれとがどのように関係づけられるのか、問題は複雑である。もちろん、ツァーリズム打倒が叫ばれているのであるから、その後市民社会の発展がはかられるのであろうけれど、ロシア的社会民主主義の理論の中には、議会主義の観念が、明確性を欠き、あるいは微弱であったことが否定できないのが大きな問題である。少なくとも個人主義、平等、各評議会、農村の自治といった観念が先行している。ロシア人民党がいう、資本主義を経ずして、直ちに社会主義に移行することができる」と主張されていることも、これらとは決して無関係ではないと考えねばならない。

とまれ、われわれはここに、メンシェビキ的思考の中にロシア社会民主主義的理論が存在したことを明確に観取

説

論

できた。それがロシアに定着しなかったのは、人民党のロシア・ジャコバニズムからボルシェビキへの発展の過程の中で、メンシユビイキの打倒、壊滅ということから、幼弱なロシア社会民主主義的思考が消滅していった結果と考えねばならない。しかしそれこそ、ツァーリズム独裁—ロシア・ジャコバニズム—ボルシェビキ—共産党一党独裁への系譜として、むしろロシアにおいては、歴史的、社会的に正当なる流れであったのかもしれないのであるけれど……。

(1) A History of Russia, Medieval, Modern, Contemporary, Paul Dukas, Macmillan, 1974, pp. 147-48. アレキサンダー二世の暗殺(一八八一年)の後、ポプェリスト運動(Populist Movement)は、二つの流れに大きく分れる。一つは、自由主義を指すもの、いま一つは、マルキシズム(Marxism)の影響下に置かれるものである。一八九四年のアレキサンダー三世の死の時期には、革命運動におけるプロレタリア段階の出現が、それと認められた。ツァーリズムに対する反対のたかまりにおける二つの段階は、まさにアレキサンダー二世(1855-81)と同三世(1881-94)の治政と照応している。この一致は、二人の君主の個性と精神状態を反映している。例えば、A History of Russia, Basil Dmytryshyn, Prentice-Hall Inc., 1977, pp. 361-67, 開放された農奴への農地割当ては、成人農夫で、肥沃な黒土地帯では、二・五—一六・二エーカー、非黒土地帯では八・一—一八・九エーカー、ステップ地帯では、八・一—三三・四エーカーであった。この償還が問題で、これは三期に分けられ、第一期では、旧所有主への奉仕が果されねばならない。その後、土地の買取り値段が決められるが、これらの買取りのための現金を所有しないのが普通の状態である農夫のために、右記の割当て量すべてが一括してそれぞれの農村コミュニティに渡され、共用の牧草地と森林地を除いて、その土地償還が、共同で果されねばならないことになっていた。政府はこのため、負債の八割までの限度で、利子付公債の形で買取り額の肩代りをしてくれた。この公債は、六分利付四九年賦であった。こうしてよき宮廷教師に恵まれ、帝王の責任を充分に自覚していたといわれたアレキサンダー二世の農奴解放は、結局、無償分割払いの土地売買契約にすぎないものとなってしまったのである。そしてなお、この契約は、償還メンバーをこの形でそのコミュニティと土地に緊縛するものとさえなってしまうという複雑な結果をも生んでいたであった。Russian Economic

History, Arcadius Kahan, ed. by Roger Weiss, The University of Chicago Press, 1989, pp. 1-13. 開放以後の土地市場には、基本的には農民への割当て地、国有地は入らず、取引は私的所有地に限られた。しかし土地市場の働きは、私有地の状況を著しく変改した。貴族、八千五百万デシヤテナ (1 desiatina は、1・〇九二五ヘクタール) から三千九百万デシヤテナへ、国有地、皇族所有地、一億六千万から一億四千四百万へ、農民と市民のそれ、一億千二百万から一億七千万へのそれぞれの増減がそれである。重大な事は、農民は、コンミューン共同所有よりも、むしろ、三千四百万デシヤテナの土地を私的に購買したということであった。……そして農業の発展、商業化、農民の消費生活のニーズ等は、おいおい農民共同体パターン規制と貴族による土地貸与の条件に合わなくなってゆき、それらは、農業生産者である農民の決定に委ねられねばならなくなっていた。……一九〇七年—一四年の間に農民共同体に所属していた千四百五〇万デシヤテナの土地が、私的所有地に付け加えられた。そして少なくとも五千万デシヤテナの土地が第一次世界大戦前夜には農民の私有地総面積となっていたと考えられる。……そしてそれと共に共同体所有の期待に反して農民社会環境の中に、社会経済的差別と階級性が出現していった。

(2) A Farewell to Marx, An Outline and Appraisal of His Theories, David Conway, Penguin Books, 1987, pp. 63-68. マルクス自身の革命二段階論についての意見をみてみよう。マルクスの基本的社会主義革命観は、ロシアに関し、ポプュリズム (Populism) 反対の立場であった。ポプュリズムは、ヘルゼンに代表されるといわれる理論で、ロシアに歴史的、伝統的に存在する農村コンミューン (Rural Commune) を基盤として、封建的ロシアは、資本主義段階を経ずして直接に共産主義に移行することができるという主張であった。マルクスは、最初、ロシア・ポプュリストを批判して、社会主義の達成条件として、生産力増強、階級意識、産業的労働力の成育を主張したが、ロシアの現状をみて、その意見を変改し、そこにそれら資本主義的条件なくとも、社会革命の起る必然性を悟るにいたったのであった。そして社会労働による生産力の発展と共に、人間の発展を説き、また古代ローマの農民土地収奪が、大土地所有 (Latifundium) と大量貨幣資本を造出して、それは、資本主義の社会的発展に道を開くべきところ、また、ローマ・プロレタリアートは、これと共に、賃金労働者となるところを、そうならず、代りに奴隷制が発達したといて、彼の西ヨーロッパにおける資本主義発達の歴史哲学の一般性に対する特異例の存することを述べたのであった。ここをもつて、マルクスは、ロシアにおいては、資本主義の発達なくとも共産主義社会の実現することを肯定したと考えられている。それと同時に、エンゲルス (Frederick Engels) の持論であったロシア社会主義革命実現の必須条件として、西欧に社会主義革命の起る必要についてもこれを事実上否定したと考えられている。マルクスは、ロシ

論

アが資本主義的発展をとげてゆくことを強く予測し、それが、農村コミュニティを破壊する方向をとるだろうが、このコミュニティ財産の残存は、ロシアにおいては、他国に比し、非常に大規模なもので、この体制の活力と、短時日になしとげられるロシア資本主義の機械化が、ロシア社会主義革命の成功に条件を形成することを述べている。これをみると、カー(Edward Hallatt Carr)のマルクスの二段階革命論(法学論集第二十二号、拙文「ロシア・メンシェビキの系譜とハレストロイカ」)の三、いわゆる二段階革命論の註、カーの所論は、ここにみる限りにおいては、こういったマルクスの二段階革命論と呼ばれるものについての種々の修正意見を無視しているか、或いは、重視していないと考えるべきかと思われる。

- (3) Michel Bakounine: *Oeuvres*, tomes III, IV, et V; *L'Empire Knouto-Germanique et La Revolution sociale*, 1908, *Et Lettres à un Français* (1870), suite, 1910, *Et Articles, ecrits pour Le Journal L'egalité*, 1912, P.V. Stock, Éditeur en tous les tomes. *Marxism in Russia*, Key Documents, 1879-1906, ed. by Neil Harding, trans. by Richard Taylor, Cambridge University Press, 1983. ロシアにおおつては「二期」ロシアの後進性と時代錯誤的現実を払拭してロシア社会、経済、政治、文化の水準を西欧的なそれらにまで引上げねばならないという熱烈な願望があった。ここから人々は、自由主義、Utilitarianism, Fourierism, Owenism に眷属する。一八四八年革命の挫折は、ロシア社会にも深刻な影響を与え、西欧ブルジョアジーに対する反感と失望が大きく広がった。ロシア社会では、健全な革命中核として農民とそのコミュニティが待望される。中央集権化、国家に反撥し、一つのグループが他の人々を圧迫する体制を非とする。人間的、遠心的、平等を基礎とした非政治社会の出現を目指すといった要素がその属性となる。ロシア・スラブ民族にとっては、政府の介入のない、できる限り遠心的に拡散した農村コミュニティに生きることが望みである。伝統的コミュニティ的土地保有体制を維持し、自由なコミュニティによる連邦制が、国家体制として望まれる。

- (4) Michel Bakounine, op. cit., *Political Terrorism*, Grant Ward-Law, Cambridge University Press, first published 1982, fifth reprint 1989, pp. 18-24. ターニンの思考は、革命の実践を中心とするところが強い。彼によれば、国家は、いかなるものでも、いつの時代でも搾取の主体であり、暴力であり、強圧である。結局、現存の社会秩序の擁護者であるにすぎない。これを倒すことが至上命令である。暴力と流血は、そのための聖なる下剤であり、革命家は、そのための聖なる使徒である。彼は、あらゆるノーマルな社会関係から自分を除外し、革命以外の感情や感興を起してはならない。常に現存の社会倫理を嫌悪し、軽蔑しなければならない。何故なれば、その目的は、現存秩序の完全破壊でなければならないからである。そして革命

家は、一握りの同志のみをもって秘密の団体をくり活動すべきである、と説いた (the Revolutionary Catechism, published in 1869, including writings of Serge Nachayev)。この点で彼はマルクスと対立的で、また彼においては、革命的破壊の後、いかなる社会を造成すべきかが不明確であった。つまりイデオロギーの明確なものをもたないということ、後者と相入れないのである。マルクスは、いうまでもなく諸悪の根源は資本主義であり、これをくつがえすのがプロレタリアートであり、そこに彼等の歴史的使命があるとするが、また国家は、いずれ消滅すべきと説くが、バクーニンのように国家が革命破壊活動の直接的目的とはみない。バクーニンは、プロレタリアートの歴史的使命に無頓着で、革命集団として農民と盗賊団をあげた。この盗賊団というのは、Wilhelm Weitling の説くところ、Louis Blanc の流れを汲むという言説で、後者は、殺人者と盗賊の大部隊を革命の前衛とみていたといういわくつきのものである。こうなると彼等の革命が、破壊のための破壊といわれても仕方のない面を含み、マルクスの運動法則としてのプロレタリア革命という科学的、社会主義学説と激しく対立したのも宜なるかなといわなければならない。なお、バクーニンは、「行動による宣伝」理論をもって、むしろ有名であるとされる。これは、Carlo Pisacane の主張、Paul Brousse の敷衍し、バクーニンの唱導したものとされる。すなわち、観念は行動から発するとし、宣伝は人心に強く訴え、これを収攬するが、新聞、パンフレット、集会、その他に発表された宣伝は、直ちに同じ方法で打ちかえされ、また労働者大衆は、活字を眼に入れる時間を持たない。しかし、この点、行動によるデモンストレーションは、無視することができず、大衆の意識を大きく目覚めさせる、と説いた。Kropotkin もこの「行動による宣伝」理論に強くひかれ、このテーゼを統、爆弾を含む一切の可能な手段をもってする絶えざるアヂテーションとして無政府主義運動の公式とした。ナチャエフ、バクーニン、クロポトキンによる無政府主義理論は、ロシアにおける一九〇五年、一九一四年の間における革命思想に強く影響したとされる。

(5) Politics and the Soviet Union, An Introductory Analysis, Mary McAuley, first published 1977, the 8th reprint 1987, Penguin Books, pp. 21-34. ロシアに於ては、農民が革命の中核と考えられた。一八七〇年代において、青年インテリ層は、農村コミューン (Peasant Commune) は平等と協同の社会的基礎を提供し得ると論じた。——農民が、ロシアを資本主義から救出することができるとする考え——必要なことは、叛乱する農民であり、地主、ツァー、警察を追い出すことであり、社会主義共和国を建設することである。しかし社会主義の定義は、この場合しかく明確ではなく、私有財産の廃止(と)いってもまた共有財産をいかに管理するかには合意はなかった)、兄弟愛、平等等をその要素と考えていたにすぎなかった。

この青年グループは、ナロードニキ (Narodniki) と呼ばれた。彼等は、農村へ出向し、農民と共に生活し、考え、彼等の思想を伝播した。しかし、農村コンミュニオンは既にして独立であり、彼等のみの団結は固く、ナロードニキは、その心情と行動にかかわらず、単なる他所者として扱われたにとどまった。しかしこうした農民を関心の的としたものは、ひとりナロードニキに止まらず、ツアーの大臣、諸々の革命派、トルストイ (Leo Tolstoy)、マルクス等、多数の人々もそうであった。ウィッテ (Sergei Witte) は、かこころ評した。「農民の条件が、我国に常につきまとう社会の神益的現象の根本的原因である」と。一八六一年三月三日の農奴解放令 (勅令, Edict of Emancipation) によって、農民は地主の土地を分け与えられた。しかし彼等は、それに補償を支払わねばならなかった。彼等は、現金を持たなかった。彼等はそれを国家から借り、何年も何年もかかって元利共に返済しなければならなかった。農民の生活は、解放によって以前より決してよくはならなかったのである。しかも土地は、農民個人の所有とはならず、農村共同体に属させられた。この集団的機関は、土地を更に分割した。農民の家庭は、一軒の住家と多くに仕切られたあまり大きくはない土地を与えられた。すなわち、それは、拡散した多くの細長い土地であった。いま一つの分割方法では、農民家庭は家と仕切り土地を与えられ、そしてそれらを耕作したが、共同体は、これらを別の方法で更に再分配するのであった。これは、細長土地の地味が、それぞれ大きく異なっていたため、平均利得を配分するためにとられた措置であるといわれた。こうして農奴解放は、農村と農民を決して以前よりは潤したとはいえなかった。この結果、恐ろしいことが起り、農民は、彼等の運命をこの期に及んではツアーにも誰にも頼ることはできず、自らの手で変改していかねばならないと決心をつけてゆくこととなるのであった。ツアーと国家は、ロシア産業革命のためにその必要資金を調達する緊急の必要があった。植民地を持たない彼等は、これを農民から税金の形でと、穀物を安く買上げることと賄った。こうして、ツアーと彼の国家と農民の対決は、不可避の運命として両者の上たうとうとのしかかってくるのであった。Karl Marx and Friedrich Engels, *The Communist Manifesto, An Introduction by A.J.P. Taylor*, Penguin Classics, 1988, the twentieth print since 1967, first published 1888. *The French Revolution*, A. Goodwin, 1968, fourth edition, reprinted 6 times, first published 1953, Hutchinson & Co. LTD. 一七八九年七月二四日〇ベヌチー監獄 (prison Bastille) の開城は、絶対王制 (monarchie absolue) の崩壊に導かれ、一七九二年八月一〇日のルイ一六世 (Louis XVI) の退位を求め、バリの革命コンミュニオン (révolutionnaire Commune) の設立は、チャイルリー宮 (Palais de Tuileries) への襲撃となつて、立憲王制の終焉となった。フランス革命の激越は、短時日の間に恐るべき激変をつぎつぎフランスに与え、これを通じ

てヨーロッパと世界に影響する。テルミドール九(9 thermidor, 一七九四年七月二七日)の変革は、更に、ジャコバンの勢力をそぎ、この変革が、フランス革命の命脈をたつて、フランスの運命を保守反動、あるいは、大ブルジョアの手に委ねることとなる。もちろん民族主義とフランス対外戦争の結果であるけれど、ナポレオン・ボナパルト(Napoleon Bonaparte)の出現とつづくナポレオン戦争が、彼の帝位への登極をうながす。最初の革命は、土地、あるいは、封建的貴族政治に対するブルジョアジー——、更に曖昧な語義では、中産階級(*classe moyenne*)によるそれであった。ジャコバン革命は、人民、すなわち貧民と大衆によるブルジョアジーへの挑戦であった。これから革命は挫折する。一つの分析は、ジャコバンは、プチ・ブルジョア(*la petite bourgeoisie*)すなわち、店舗保有商人、小売商人として定義され、真の民衆ではないとして忘れ去られた。貧民は、新しい、更にローマンチックな定義を与えられ、プロレタリアート(*le prolétariat*)となった。彼等は、労働と子供以外には何の財産も有しない階級とされた。更に階級の分析にふれると、英国の一八三二年章典は、中産階級の特権的貴族階級に対する勝利と定義づけられ、もっと正確には、穀物条令(*Corn Laws*)の廃棄は、産業資本家の大小地主に対する勝利とされた。フランスにおいては、一八三〇年の革命に続くすべてがブルジョアと定義され、ルイ・フィリップ(*Louis Philippe*)は、ブルジョア王(*Le Roi bourgeois*)とたたえられ、ラフィット(*Latitte Jacques*)は、一八三〇年、「今や銀行マンが支配する」と発言して、事物の真を喝破した。あらゆる立憲国では、続いて制限選挙制が導入され、これには中産階級は含まれたが、プロレタリアートは疎外の憂き目をみた。約二〇年前、ラスキ(*Harold Laski*)は述べた。一九四五年の労働党政府は、総選挙によって選ばれ、人民の欲することを実行したが、それは、フランス、ロシア、そしてその他のどの革命よりもマルキシスト(*Marxists*)の理念に近いものであった、と。

(6) Selected Philosophical Essays, Chernyshevsky, Nikolai Gavrilovich, Foreign Languages Publishing House, Moscow, 1953. Selected Philosophical Works, Herzen, Alexander Ivanovich, Foreign Languages Publishing House, Moscow, 1956. ヘルゼン(一八二一—七〇)、チェルニシウスキー(一八二八—八九)共に人民党員(*Populists*)と呼ばれる。この期ロシア人民はほとんど(八〇—九〇%)が農民であった。前者は、人民党(したがってこれは農民党であった)の創設者と目されるが、後者の方が行動的、実力派であった。人民党は、ロシア農村コミュニティの自治形態の強さに根ざしており、両者共、ロシアでは農村コミュニティから資本主義の発達をまたず、社会主義への直接移行が行われ得ると説いた。ヘルゼンは、デセンブリスト(*Decembrists*)の民主的綱領にひかれ、またサン・シモン(*Saint-Simon*)に影響されるところが強かった。彼

はしかし、議会議主義には反対の立場であつたし、マルクスや独裁的革命組織 (Dictatorial Revolutionary Organisation) との線を画していた。両者共に、彼等の傾向と心情と行動から一言もって偉大なる革命的民主主義者 (great revolutionary democrats) と呼ばれ、その闘争の目標は、revolutionary democratic social changes にあるとされた。そしてこれらからして彼等はロシア社会民主主義 (Russian Social Democracy) の先導と位置づけられている。ヘルゼンの思考の大略は、左のごとくである。彼は、唯物主義者で、精神は、物質と歴史的環境から結果すると説く。しかし一方、天才を礼讃して精神を重んじ、それが歴史を動かす原動力であると喝破する。したがって彼の歴史の動因は、階級闘争ではなく、古き旧式觀念に対する合理的、革命的、科学的、進歩的觀念と信念の闘争がそれであつた。人は自覚とスピーチの程度とまた道具の使用によつて動物から區別される。この闘争では、新しい、成長的、発展的條件が、必然的に勝利を得るが、しかし古きものは、その力が枯渇するまで倒れない。これは、經濟原則である。古きものを守るものは、古き社会組織である。個人は、環境と出来事から生れるが、それはまた、前者に影響する。天才は、社会生活の古き形態を破壊するために現れる。しかしその力は、彼の絶えざる緊密なる民衆との接触からのみ生れ出るものである。党は、多数に対する少数者の思考、努力、苦難の表現として組織される。資本の排他的支配、財産の不可侵は、封建制が崩壊したようにいつか終る。歴史的变化は、經濟的要因に依拠している。このことへの無理解が現在までの革命を失敗に導いた。經濟生活の歴史的条件は、階級間の生産手段と物質的富の配分の形態によつて決定される。国家は、公安を守る機関である。立憲君主制は、国民の幻想であり、馬鹿げた権力分立、宗教的代表觀念、警察の中央集権化、そしてキリスト教の平等觀念と同様な視覚的な総選挙制度等にかざられているにすぎないものである。共和国は、人民解放の原則、運動と変化、すなわちその希望を体现しているが、君主制度の残存をもち、その慣習を払拭せず、君主制に逆転する。更に悪いことには、腐敗した内閣とその代理機関、裏切りの独裁的な議會の暴政と無頼的な兵士の一隊の圧制的支配に落ち込む契機も有しているもの、と説いた。ヘルゼンは、生涯著作、全集に二二卷 (Works, ed. by Lemke, 22 vols., 1919-25) そのうち一種類の雑誌と新聞 (Polymanya (The Polar Star), The Bell) を発行し、その全貌の解明は、ここに誌した数語のコメントのみでは實際上は不可能なほどである。チェルニシウスキーは、またロシア社会民主主義の偉大なる先導と称される。ヘルゼンの次の世代をリードしたともされる唯物論科学者であつたが、彼の科学は、ロシアの革命的民主主義的变化のための闘争手段と定義された。彼の関心は、一八六〇年代のロシア資本主義の発達と農村問題、特に農奴の解放に向けられた。すなわち、国内市場、貿易、貨幣、技術、産業、農業の機械化等資本主義の発達のために必要と

される自由なる大衆労働者の存在のための解放がそれである。それと当時、クリミア戦争敗戦の農奴足枷論も盛んであった。小論においてしばしば指摘したような、農奴解放の不徹底さが、この時期、農民の不安、無秩序、明確な叛乱を誘発し、ヘルゼンの著作 *Baptised Property, Belinsky* の書簡、雑誌 *Sovremennik* (チエルニシウスキーのエッセイを含む) 等が広く世間で読まれた。これらに学生運動も点綴した。これらの実際の理論的指導者の一人が、チエルニシウスキーで、その「To the Gentry's Peasants」は社会革命の指導書となり、彼はその活動のため、しばしば逮捕、投獄された。チエルニシウスキーは、行動の人であり、被逮捕歴は、生涯の半ばを越える。What is to be done を著わし、これはレーニンの同名の書物を生むほどの影響を世間に与えた。絶対王制は、貴族的階層制の頂点とし、階級闘争以外に解放はないと説く。しかし彼は、ついに歴史の唯物的観念に立脚する理論は創造し得なかったといわれる。彼の唯物論は、カント、ヘーゲルと対立し、anthropology に基づき、対象が人間の理念と感覚を創造する時まで説いた。宗教は、人間の神秘的な、不安な感情と欲望と思考の表現とした。これらの意味において、妥協せざる社会民主主義的革命家として、彼はマルクス前のロシア社会革命派の代表であり、レーニンの先蹤と目されている。また彼は、正戦、不正戦を説き、ナポレオン一世覆滅の一八二二年戦役は、民族に恩恵を与えた正戦なり、と主張している。これよりして、彼も時代の子であると考へざるを得ない。全著作は一〇巻、ロシア語で、一九〇五年—六年に全集として出版されている。

(7) Neil Harding and Richard Taylor, op. cit., pp. 41-72 & 81-84, Socialism and the Political Struggle, Programme of the Social Democratic Emancipation of Labour Group, Propaganda Among the Workers, from Our Differences, From the Publishers of the 'Workers' Library, Second Draft Programme of the Russian Social Democrats. Selected Philosophical Works, Georgi Valentinovich Plekhanov (1857-1918), Five Vols, Progress Publishers, Moscow, 1974. ブルジョアジーが封建領主に対し偉大なる闘争をくりひろげたように、プロレタリアートも彼等に対し、偉大なる解放のための闘争に結集しなければならぬ。ブルジョアジーの歴史的使命は最後に近づきつつあり、プロレタリアートこそが社会の進歩的希望である。直接人民立法、社会的欲望の達成できる体制を要求する等と、ブレハノフは社会改革に対し、過激な戦闘的言辞を弄する。しかし、続いて次のようにいう。「……抑圧された階級は、政治的自助 (political self-help) が、ランゲ (Lange) のいうように社会的自助 (social self-help) の最も重要な形態であることを理解しはじめる。そして彼等は、社会的関係を変化することに、また、彼等自身の発展と幸福の条件に社会的秩序をあわすことによって、自らをたすけるために、その政治的支配

獲得に向つて努力する。しかし、彼等はいきなり支配を達成しようとは考えない。彼等が恐るべき力となつて、敵対者の心から反撃の考えを消去してしまうのは、それは、徐々にである。長い間、彼等は譲与のみを求め、彼等に支配をではなく将来の支配に向つて成長し、成熟する機会を与える改革のみ要求してきた。その改革は、彼等の要求のうち最も緊急かつ直接的なそれを満足させ、彼等の勢力範囲を公的生活についてすこし伸張させるためのそれである。被抑圧階級が、決定的闘争に必要なその粘り、大胆さ、成熟さを獲得するのは、敵領土のそれぞれ分離した小地域への頑強な攻撃の教訓を得ることを通じてのみである。……しかし一旦これらの資質を獲得した暁には、彼等は、その反対者を最終的に歴史によつて断罪される階級とみなすことができる。彼等は、もはやその勝利につき何等の疑いをもつ必要はない。いわゆる革命は、それが政治闘争となるときにのみ、意識的となる革命的階級闘争の長いドラマにおける最後の行動であるにすぎない」と。こうなつてくると、やはり、ブレハーノフの社会的支配形態分析と、その打破のための革命的戦術論、つまりその実践論との間には、そくばくの逕庭の存することを認めざるを得ない。そしてここに、ボルシェヴィキ (Bolshevik)、もしくは、戦闘的共産主義の社会民主主義に對する嫌惡的評價が起る明確な雛形があるようである。……少なくともそう思える。なおブレハーノフは、労働階級の經濟的解放につき、生産手段とその果実の彼等による集団所有 (collective ownership by the working people)、平和的・全的社会發展のため (矛盾、衝突の解消) の産業技術の發展、直接人民立法等を要求した。そして更に、立法議會への選挙権・被選挙権の獲得、同様に地方的・共同体的自治機關へのそれら、社会の最貧層から選挙される人民の代表に、法律によつて決定される財政的報酬の供与、人格と住居の不可侵、移動と雇傭の自由、宗教・出自 (種族) に関係なき市民的平等、人民の武装をもつて常備軍の存在にかえる、全私法・刑法体系の改訂、階級差別と人間の尊厳を無視するとき刑罰の廢止等を、その社会主義社会建設のためのスローガンとしてかかげた。